

サンプル版

『淫習シリーズ 02

オツボの定め 狐伏太鼓一本撥祭』

作者：金目

目次

登場人物紹介

第 01 話 タベのオツボ修練 三擦り三屈行（射精できない手コキによる喘ぎ）
サンプルはここまでとなります。

以下、製品版収録

第 02 話 苛む淫夢 射精渴望に喘ぐ夜（エロ本オナニーの淫夢）

第 03 話 朝のオツボ修練 魔羅清浄（淫欲懺悔と魔羅磨き、玉蹴り）

幕間 狐伏太鼓一本撥祭 祭礼前の賑わい（日常シーン）

第 04 話 馬曳漏水行列（乗馬中の潮噴き）

第 05 話 山頂の祭礼 山神の供犠（アナル処女喪失、アナルセックス）

第 06 話 狐伏太鼓を鳴らすは一本撥（アナルセックス）

最終話 夜辻に立つメス狐（アナルセックス）

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有などの著作権法に触れる行為、なりすまし・模倣を目的とした A I ・機械学習への利用などは控えていただきますようお願いします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いします。

登場人物

花房 朔太郎（はなぶさ さくたろう）

22 歳。男。戸伏村役場職員にして、第 24 代オツボ。

平常時 12.2cm、勃起時 25.1cm の太魔羅。ずる剥け。

戸伏村で 10 年に一度行われる狐伏太鼓一本撥祭において重要な役目を果たすオツボに選ばれ、ほぼ 7 年間、完全なる射精管理を受けている。

山木 藤吉（やまぎ とうきち）

22 歳。男。戸伏村の猟師。

平常時 7.3cm、勃起時 16.3cm の仮性包茎。

朔太郎と洋子の共通の友人であり、朔太郎が無事にオツボを務め終わることを応援している。

戸内 竜生（とうち たつき）

27 歳。男。戸内村村長補佐。

平常時 6.4cm、勃起時 15.4cm のずる剥け。

朔太郎と藤吉の兄貴分。村長補佐として村役場で働いている。

戸内村の将来を心配し、移住者受け入れに向けての準備を進めている。

戸内 将成（とうち まさなり）

58 歳。男。戸内村村長。

戸内家の当主として、狐伏太鼓一本撥祭の祭主を務める。

戸内家は、歴代のオツボに射精管理を施し、また、歴代のオツボに毎年、慰労金を支払っている。

静間 洋子（しずま ようこ）

26 歳。女性。戸内村満載食堂の看板娘。

朔太郎の片思いの相手。洋子もまた、朔太郎を憎からず思っている。

村外からの客も迎え入れる食堂の娘であることから、狐伏太鼓一本撥祭について察していることがある。

第 01 話 タベのオツボ修練 三擦り三屈行

山菜やキノコ、鹿や猪の肉、養蜂農家が精製したハチミツなど、山の恵みで有名な山村である戸内村の夕暮れ時、代々村長を務める戸内家の前にある修練広場にて、花房朔太郎は口を真一文字に結び、白禪一丁に足袋を履いただけの姿で、堂々と立っていた。

白禪一丁に足袋を履いただけの朔太郎の肉体は、男臭さがムンムンとしている。

朔太郎の両脚は太く、すね毛や太ももの毛がもさっと生えている。

固く締められた白禪は、朔太郎の太魔羅によって大きくぼこっと盛り上がっている。

盛り上がった前袋には、オツボの心得の一つである「禁漏」と墨で記されている。

腹筋は硬く引き締まり、胸板は分厚く、両腕は逞しい。

上半身にも体毛がもさっと生え、男臭さを漂わせている朔太郎は、如何なる苦難であろうとも正面から受け止める山男の度量に満ちている。

朔太郎の顔は力強い造形をしている一方で、厳めしさはない。

にかっと笑えば太陽のように朗らかで人好きのする笑みになる。

もっとも、今の朔太郎は口を真一文字に結び、心の内で荒れ狂う波を表に漏らさぬように努めている。

朔太郎のように、男らしく逞しい身体を備えた山男であろうとも、途方もない忍従をもって受け止めねばならない修練に、これから挑まねばならないためだ。

戸内を囲む山々の神々よ。

歴代のオツボよ。

どうか、俺に恥辱に耐える力をお与えください。

これから行われる修練に耐えるため、朔太郎は心の中で真剣に祈った。

そんな朔太郎の様子を、戸内村の住民の6割ぐらいの村民が見守っている。

村民たちは、今代のオツボである朔太郎のオツボ修練の様子を見守るために集まっている。

オツボとは、この戸内村で10年に一度行われる奇祭、狐伏太鼓一本撥祭(こぶせ だいこ いっぽんばち まつり)において、戸内村を囲む山々の神々より、恵みの種を受け、山々の神々の使いである紅狐として、豊穰の祭器である狐伏太鼓を持ち帰る役目を与えられた者である。

戸内村の営みは、山菜やキノコ、鹿や猪の肉、養蜂農家が精製したハチミツなど、山の恵みに大きく依存している。

故に、各地の祭が廃れ、行事として行われるだけになる中、戸内村の村民たちにとって、狐伏太鼓一本撥祭と、オツボへの関心はとても深い。

加えて、無事に務めを終えたオツボには、戸内村から報奨金が支払われている。

オツボが正しく務めを果たすことは、戸内村にとって、それほどまでに大きな意義のある偉業である。

故に、オツボとして修練に励む朔太郎の姿を見守るために、多くの村民たちが集まるのだ。

「皆の者！

これより、第 24 代オツボたる花房朔太郎の夕べのオツボ修練を行う！

第 24 代オツボ！ 花房朔太郎！

尊き狐伏太鼓一本撥祭において！

山々の神々より恵みの種を拝領するため！

7 年間の禁欲の行を行う男子よ！

オツボ修練により！

その心身を磨きあげるのだ！」

修練広場に、今代の戸内村の村長である戸内村長が現れ、夕べのオツボ修練の開始を宣告する。

「拝命いたします！」

将成村長の宣告に、朔太郎はオツボとして堂々と宣誓をした。

花房朔太郎は、戸内村第 24 代のオツボである。

狐伏太鼓一本撥祭において特別な役目を果たすオツボには、3 つの責務を課されている。

一つは、戸内村の中において、下半身は白褌と足袋のみを着用した姿であること。

一つは、将成村長が告げたように、7 年間の完全禁欲である。

一つは、オツボ修練を修めることである。

朔太郎は、先代のオツボが、オツボ修練に耐え抜いた姿を覚えている。

10 年前の朔太郎は、精通前であり、性欲を備える前であった。

故に当時の朔太郎は、先代のオツボの苦悩を正しく受け止めていなかった。

だが、先代のオツボが悶え、苦しみなながらもオツボ修練を修めた様子を、朔太郎は今もなお、鮮明に思い出せる。

だから、今代のオツボである朔太郎も、オツボ修練に耐え抜き、修めなければならないと理解している。

また、村民たちがオツボへの関心を強く抱いていることも分かっている。

けれど、朔太郎の心は、決意を揺さぶるほどの激しい羞恥に悶えている。

オツボ修練を見られることは、朔太郎にとって、とても恥ずかしいことだからだ。

「第 24 代オツボ、花房朔太郎よ。

夕べのオツボ修練である三擦り三屈行を始める！

褌を解け！」

「はい！」

将成村長の号令に、朔太郎は羞恥を押し殺して返事をした。

地方の山村の例に漏れず、戸内村もまた高齢化が進んでいる。

とはいえ、若者や子どもたちがまったくいないわけではなく、修練広場に集まった村人の中には、子どもや女性もいる。

女性たちの中に、朔太郎の片思いの相手である洋子はいないことは、朔太郎にとってほんの僅かだけの救いである。

とはいえ、洋子の目がないとはいえ、全裸になることへの恥ずかしさが消えるわけではな

い。

彼らの前で白禪を解き、太魔羅を丸出しにすることが、朔太郎にはとても恥ずかしい。

オツボという役目の重要性と、戸内村の村民たちの強い関心と祈りを知っている朔太郎だが、一人の青年として、太魔羅を丸出しにして、女性や子どもたちの目に晒すことは、とても恥ずかしいことなのだ。

それでも朔太郎は、第24代オツボとして、白禪を解いた。

ぼろりん！

朔太郎の太魔羅が大きく揺れる。

朔太郎の太魔羅は、童貞とは思えないほどに太々しい。

ずる剥けの亀頭は平常時でも雁首が高く、太い陰茎にはマ○コへの渴望がたっぷりと詰まっている。

金玉も大きく、その中で荒々しい性欲が滾っている。

この雄々しい太魔羅を見れば、大抵の者が奔放な性欲を頻繁に発散しているのだな、と邪推をするだろう。

けれど、朔太郎は射精という男の快楽を妨げられている。

朔太郎の太魔羅の根本には、特殊なパルスを発することで射精を防ぐ射精防止リングが装着されている。

装着期間は既に7年近い。

7年間の完全禁欲を求められるオツボに選ばれた日から、朔太郎は射精を禁じられ続けているのだ。

10代後半の男子ならば、大抵はスケベなことに関心を持ち、様々なきっかけでオナニーに耽るものだ。

けれど、朔太郎の青春は、射精の快感とは無縁なまま、過ぎ去った。

今もなお太魔羅の中で、青い性欲の名残が、未練がましく煮えたぎっているのだ。

「でっけー」

「ほんとでっけーよな！ 朔太郎兄ちゃんのデカチン」

遠慮のない子どもたちの笑い声が朔太郎の羞恥を煽る。

「ああ、見事な太魔羅だな」

「朔太郎は本当に、見事な太魔羅をぶら下げている」

「あんなにデカイ魔羅を下げてもお、オツボとして完全禁欲を果たして、ありがたいね」

一方の大人たちは、朔太郎の太魔羅の大きさと、太魔羅の中で煮えたぎる性欲に耐え、禁欲を続ける朔太郎への称賛を投じる。

とはいえ、露出趣味のない朔太郎にとって、太魔羅にあれこれと言われること自体が恥ずかしく、羞恥で太魔羅が縮み上がってしまう。

毎日の朝と夕べに太魔羅を晒しているとはいえ、朔太郎は人前で全裸になることに慣れることは、どうしてもできない。

集まった村人の中には、年頃の女性もいる。

戸内村の村民にとって、オツボが日ごと、朝と夕べのオツボ修練において、全裸になることは「当たり前のこと」であり、露出趣味や変態行為とは異なる、戸内村の伝統である。

だから、年頃の女性たちも、朔太郎のオツボ修練を見守ることは、伝統行事の一環として

受け止めているのだ。

朔太郎も、オツボ修練が、戸内村の伝統であることは理解している。

けれど、若い女性にも太魔羅を見られ、これから恥ずかしい姿を晒さなければならないと思うと、強い羞恥で内臓が縮み上がる。

それでも朔太郎は、オツボ修練を修めなければならない。

歴代のオツボたちが、完全禁欲に悶え、恥辱に震えながらもオツボとしての務めを果たしたように、第 24 代オツボである朔太郎も、オツボとしての務めを果たす義務があるのだ。

「三擦り三屈行とは！」

朔太郎は、オツボ修練の作法に乗っ取り、三擦り三屈行についての説明を始めた。

「オツボとして禁欲を堅持する魔羅を 3 回、根本から亀頭へと上下に擦り、しかる後に屈伸を三度行う修練である！

戸内を囲む山々の神々よ！

その荒々しき御魂を！

我が修練により！

和やかにならしめよ！」

堂々とした態度で宣言をしたものの、朔太郎の心は羞恥と射精への渴望によって震えていた。

第 24 代オツボとして、朔太郎は 7 年近く、射精を取り上げられている。

7 年の完全禁欲を求められるオツボとして当然の責務であり、歴代のオツボたちも頻繁に射精への渴望に襲われながらも、守り抜いてきた 7 年間の完全禁欲だ。

だから朔太郎も、オツボとしての務めを守りたいと願っている。

けれど、青春の影である青い性欲は朔太郎の太魔羅の中で今もなお、煮えたぎっている。

射精防止リングによって射精を禁じられているとはいえ、太魔羅を扱けば、煮えたぎる射精欲が大地を焼きつくす火砕流のように朔太郎の心を焼き払う。

男にとって、射精とは解放である。

チンポを扱くときの切なさやもどかしさが快感として受容されているのは、射精という解放とセットになっているためだ。

切なさやもどかしさがどれほど積もり、男を苛もうとも、その苦しみや悶えは、射精によって昇華され、男の快感として輝くのだ。

けれど、オツボである朔太郎は射精を禁じられている。

それでもなお、太魔羅を扱かなければならないのだ。

その恥ずかしさと苦しみは、山男としての風貌と屈強な肉体を備える朔太郎であろうとも、平気ではいられない男の苦しみである。

けれど、歴代のオツボが途方もない羞恥と、凄まじい男の苦しみに耐え、オツボ修練を乗り越えたことを、朔太郎は知っている。

己だけが、逃れるわけにはいかないと理解している。

だから朔太郎は、村人たちに見守られる中、己の太魔羅を握るしかない。

「三擦り三屈行！ 開始！ 一擦り！」

朔太郎は、腹の底から声を張り上げ、太魔羅を一度扱く。

腹の底から声を張り上げるのは、オツボ修練の作法であり、同時に、煮えたぎる射精欲を

御するための工夫でもある。

太魔羅を一往復扱いただけで、朔太郎は分厚いケツをぎゅっと引き締め、全身を小刻みに震わせる。

5年近く、射精を禁じられている朔太郎にとって、太魔羅を一往復扱うだけでも理性を飛ばしそうになるほどの快感なのだ、

頭は、何度扱いても射精防止リングがある限り射精できないことを知っている。

けれど海綿体や金玉にとって、射精防止リングなど無関係な装飾品でしかない。

だから一往復の手コキ、たった一往復の手コキであろうとも、煮えたぎった性欲が大きいうねり、射精欲の荒波となって朔太郎の全身に波及する。

射精させてくれえええええええええええ！

朔太郎は心の中で浅ましく喘いだ。

朔太郎は、射精の快感を知っている。

今年、22歳となる朔太郎がオツボに選ばれたのは約7年前のことである。

既に精通を終え、オナニーに耽るようになっていた年頃に、朔太郎はオツボに選ばれ、射精防止リングを嵌められた。

射精の気持ちよさを知る朔太郎にとって、射精を覚えた朔太郎の男の身体にとって、射精を禁じられ続けることは、苦行でしかない。

しかも、毎日の朝と夕べに、射精できないのに太魔羅を扱かなければならない。

射精できないのに、射精の快感への渴望を煽られるのだ。

一往復の手コキを終えた朔太郎の右手がガタガタと震える。

このまま、恥も外聞もなく、射精に至るまで衝動のまま、シコシコしたいと朔太郎の男の身体が渴望している。

けれど、それは許されないことだ。

朔太郎は歯を食いしばり、右手に気合を集中させる。

歴代のオツボは、この苦しみを乗り越え、オツボの務めを果たした。

ならば、朔太郎も同じように、この苦しみに耐えなければならない。

「二擦り！」

朔太郎は気力を奮い立たせ、二往復目の手コキを行う。

根本から亀頭に向かって手を動かすだけで、全身の神経が海綿体になったかのように膨張し、射精欲を煮えたぎらせているかのような錯覚に襲われる。

射精させてくれえええええええええええ！

朔太郎は心の中で叫ぶ。

射精防止リングによって戒められ、射精を封じられていようとも、手コキをすれば射精欲を燃え上がらせるのが男の身体だ。

ましてや、朔太郎は射精の快感を知らながら、7年近い禁欲を強いられている。

たった二往復の手コキであろうとも、煮えたぎる射精欲に心身を打ちのめされても仕方

がないのだ。

「はははは、たった二往復で勃起し始めたじゃないか」

「ああ、素晴らしい性欲。素晴らしい禁欲だ」

「朔太郎兄ちゃん、デカチンやべえな」

村民たちが指摘する通り、たった二往復の手コキで朔太郎の太魔羅はガチガチに勃起し始める。

「っ……」

朔太郎は歯を食いしばり、ケツをぎゅっと引き締め、軽い眩暈に備える。

朔太郎の太魔羅はデカチンの中でも大きな方であり、その長大な海綿体に向かって血液が流れ込むと、頭に回る血液の量が減って、貧血による軽い眩暈を起こすことがあるのだ。

デカチンが背負う業である勃起眩暈に備え、朔太郎はケツをぎゅっと引き締め、逞しい両脚に力を込める。

朔太郎は、軽い眩暈を感じ、目を一度閉じる。

そして、深呼吸をし、勃起に伴う軽い眩暈をやり過ごした。

朔太郎のガン勃起太魔羅は、7年近く射精を禁じられており、当然のことながら、女性の身体を知らぬ童貞である。

けれど、ガン勃起太魔羅の威容は、童貞とは思えないほどの迫力に満ちている。

まず、上方に向かって勃起している陰茎が太く、雄々しい。

平常時でも平均的なチンポに比べて太く長かったというのに、膨張率が凄まじく、陰茎の直径もかなり広い。

恐らく、女性の小さな手では握りしめることは不可能だろう。

太い陰茎には勃起に伴い、裏筋に尿道が大きく張り出している。

大きく張り出した尿道の先には雁首があり、雁首も高い。

こんなに大きく張り出した雁首で中を抜き差しされたのならば、突かれる感覚だけではなく、中を擦られる感覚も強まるに違いない。

亀頭も陰茎に負けず劣らず大きく、貞節を守り抜いた証である清らかなピンク色だけが、朔太郎の童貞の証拠として相応しいだろう。

朔太郎の玉袋は勃起に伴い大きく収縮し、大きな玉袋が陰茎の根本に引っつくほどに収縮している。

おかげで、朔太郎の金玉の大きさが丸わかりである。

「あんなにもでけえ金玉に、7年分の禁欲が詰まっているんだよなあ」

「ああ、さすがはオツボだ」

「見事な太魔羅、見事な金玉ですね」

村民たちが、朔太郎のガン勃起太魔羅の雄々しさや、青い性欲が煮えたぎる金玉への称賛の言葉を口にしている。

けれど、そうした称賛の言葉は、朔太郎にとって、羞恥を煽るだけだ。

山の恵みに大きく依存した営みを送っている戸内村にとって、山々の神々から恵みの種を受け取り、豊穡の祭器である狐伏太鼓を持ち帰る奇祭、狐伏太鼓一本撥祭がただの行事ではなく、祈りと共にある真の祭であることを、朔太郎自身、感じている。

けれど、戸内村の村民たちの期待と祈りは、朔太郎の羞恥心を宥めることはできない。

それはそれとして、太魔羅を見物されることは、朔太郎にとって恥ずかしいことなのだ。
「三擦り！」

朔太郎は、羞恥に震えながら、ガン勃起太魔羅の根元を握り、亀頭に向かって動かし始める。

ゾゾゾゾゾと全身の神経が太魔羅になったかのように、手コキの快感が朔太郎の身体に反響する。

射精させてくれよおおおおおおおおおおおおおおおおお！

朔太郎は、オツボとしての責任から、切実な叫びを心の中に留めた。

射精への衝動が強い青春自体を禁欲で閉ざされた朔太郎にとって、射精への渴望に耐えることは困難極まることだ。

青い性欲の未練が煮えたぎる金玉が暴れ、朔太郎の身体と頭に射精させろと、轟く稲妻のように叫んでいる。

射精したい射精したい射精したい射精したい！

シコシコズコバコビュッビュしたい！

射精させろ射精させろ射精させろ射精！

たった、三擦りでありながら、朔太郎の身体も、心も、射精への渴望に打ちのめされる。

握りしめた右手が亀頭に達したとき、朔太郎は大きく息を吐く。

そうしなければ、衝動のままに、届くことのない射精のために手コキを激しく繰り返してしまいそうだからだ。

射精防止リングがあるため、朔太郎がオナ猿のように激しい手コキを繰り返そうとも、射精という結果に至ることはない。

「ひゅー……ひゅー……ひゅー……」

朔太郎は、荒ぶる射精欲を少しでも冷まそうと、呼吸を繰り返す。

射精防止リングがなかった頃のオツボは、意志の力だけで荒ぶる射精欲に耐え、オツボの務めを果たしたのだ。

それならば、射精防止リングという文明の利器の助けを得ている朔太郎も、射精欲に耐え、オナ猿のように見苦しく手コキに溺れようとする浅ましい己に克たなければならない。

朔太郎は、オツボへの期待を胸に、オツボ修練を見守る村の大人たちの顔を思い返す。

次期村長として、村役場で働いている兄貴分の竜生の顔を思い出す。

竜生は、戸内村の将来を安定させるため、移住者受け入れの準備を進めている。

戸内村どころか、全国単位で見ても数少ない若い猟師として依頼を受け、周辺の山村を巡る親友の藤吉の顔を思い出す。

そして……朔太郎は、この戸内村唯一の食堂である満載食堂の看板娘であり、片思いの相手である洋子の笑顔を思い出す。

朔太郎は、この戸内村を、戸内村に住む人々を愛している。

だからこそ、この戸内村において重要な奇祭である狐伏太鼓一本撥祭の第24代オツボを

務めあげる責務がある。

羞恥心を殺すことはできなくとも、浅ましく暴れ狂う射精欲に耐え、オツボの貞節を守ることは、果たさなければならないのだ。

「おおおおおおおおおおお！」

朔太郎は、気合を入れ、卑しい射精欲に打ち勝つ雄たけびを上げた。

そして、亀頭で止まっていた右手をゆっくりと根本に動かし始めた。

右手の動きで、朔太郎の全身の細胞が射精への渴望を叫ぶ。

けれど朔太郎は、その叫びに屈しまいと必死に大事な戸内村の人々の、片思いの相手である洋子の顔を思い出しながら、射精欲に抵抗する。

意志と気力を奮い立たせ、朔太郎は右手をガン勃ち太魔羅の根本まで戻した。

射精欲に突き動かされ、手コキを続けぬよう、朔太郎は素早く右手を放した。

そして、両腕を大きく左右に開き、胸の前で大きく打ち鳴らした。

「三擦りー！ 三擦りー！」

オツボ修練の一つである三擦り三屈行の作法に従い、朔太郎は大声で叫んだ。

たったの三往復とはいえ、手コキで感じている己を見られていることに、朔太郎の羞恥心は激しく嘆き、震えている。

こんな時代遅れの祭に何の意味がある、と朔太郎の羞恥心が叫び、朔太郎の荒ぶる射精欲もそれに同調する。

けれど、朔太郎は、無理やり気力を奮い立たせ、羞恥心と射精欲に流されぬよう、己を戒める。

「三屈行開始！」

朔太郎は叫び、三屈行を始める。

両腕を前に伸ばし、両脚を肩幅に開く。

そして、ゆっくりと腰を落とし、太ももが地面と水平になるまで膝を曲げる。

三屈行とは要するに、スクワットなのだ。

朔太郎は深く落としたケツをゆっくりと持ち上げ始める。

そして、直立の姿勢に戻った朔太郎は腰に両手を当て、胸を張った。

「一屈行！」

三擦りと同様に、朔太郎は叫び、そして三屈行の2回目に入った。

山男のごとき、力強さと男臭さを備えた全裸の青年が、真剣な表情でスクワットを行っている。

朔太郎の真剣さは、たとえ、狐伏太鼓一本撥祭を知らずとも、何か重要な行いとしての全裸スクワットであると、見る者の心を打つ説得力がある。

「いいぞ！ 朔太郎！」

「今日のオツボ修練も良くできているぞ！」

「朔太郎！ 頑張れ！」

村人たちが朔太郎に声援を送る。

村人たちにとっても、オツボが無事に狐伏太鼓一本撥祭で役目を果たせるかどうかは、大きな関心事なのだ。

山の恵みに大きく依存をした営みを送っている自覚がある戸内村の大人たちにとって、

狐伏太鼓一本撥祭とは、行事ではなく、祈りなのだ。

「二屈行！」

村人たちの声援に応えるように、朔太郎は声を張り上げた。

朔太郎にとって、大きな声で叫ぶことは、村人たちの声援に対する応え以上の意味を持つ。夕べのオツボ修練である三擦り三屈行は、10 セット行うことになっている。

三屈行の間に、荒ぶる射精欲に打ち克つための気力を充填しなければならないのだ。

「三屈行！」

朔太郎は、気力を奮い立たせ、ガン勃ち太魔羅を握る勇気を掴むために、雄々しく叫び、ケツを大きく下げる。

太ももが地面と水平になるまで腰を落とした朔太郎は、ゆっくりと姿勢を戻す。

「三擦り三屈行！ 一組完了！」

朔太郎は、三擦り三屈行の2セット目に入る勇気を奮い立たせるため、雄々しく叫ぶ。

朔太郎は、歴代のオツボたちの苦悶と恥辱を思い、戸内村の村民たちの祈りを思う。

そして、次にガン勃ち太魔羅を握ったとき、荒ぶる射精渴望に負け、オナ猿のように激しく手コキをしてしまわぬよう、強く強く、己の心を戒める。

「三擦り三屈行！ 二組開始！」

朔太郎は、決意を込めて叫び、ガン勃ち太魔羅を握る。

シコシコしてえ！ シコシコしてえよ！

太魔羅シコシコズコバコしてザーメンぶっ放してええ！

ザーメンぶっ放してええ！ 俺のザーメンをぶっ放させてくれえええ！

ガン勃ち太魔羅を握っただけで、朔太郎の全身の細胞が射精渴望に震え、右手で激しく手コキをしようと暴れはじめる。

朔太郎は、陰茎が痛むほどに強く、右手を握りしめ、破滅的な射精渴望に耐える。

既に7年近く、日ごと、夕べに行っている三擦り三屈行だが、朔太郎は、三擦り三屈行のたびに、己の自制心を限界まで酷使している。

青い性欲が発散の機会もなく戒められ、海綿体や金玉の中で未練を叫び続け、決壊する好機を常に窺っているため、朔太郎は気を緩めることも難しいのだ。

「一擦り！」

朔太郎は強く歯を食いしばり、陰茎の根本で握った右手をゆっくりと亀頭に向けて動かす。

シコシコズコバコビュッビュ！ シコシコズコバコビュッビュ！ シコシコズコバコビュッビュ！ シコシコズコバコビュッビュ！ シコシコズコバコビュッビュ！ シコシコズコバコビュッビュ！ シコシコズコバコビュッビュ！ シコシコズコバコビュッビュ！

右手を少し動かしただけで、朔太郎の心と身体が射精を求めて渴望を叫ぶ。

朔太郎が強く歯を食いしばっているため、顔が真っ赤になっている。

耐えなければならない！ 耐えなければならない！

朔太郎は、射精渴望に飲み込まれそうになりながらも、歴代のオツボたちの苦悶と恥辱を思い出し、耐えようとする。

まだ、夕べのオツボ修練である三擦り三屈行は、半分も終わっていない。

「ううううううううううあああああああああああああああ！」

朔太郎の切なく悶える叫びが修練広場に響く。

夕べのオツボ修練である三擦り三屈行も、最後の手コキに入ったのだ。

朔太郎は、目尻に涙を浮かべ、喘ぎながら右手を陰茎の根本から亀頭に向かって動かしている。

三擦り三屈行の10セット目の最後、手コキの回数としては30往復目ではない。

けれど、オツボとして7年近い完全禁欲を課され、青い性欲が煮えたぎる青春において、射精を封じられてきた朔太郎にとって、たったの30往復目の手コキであろうとも、射精を強く求める極上のマ○コに等しい。

朔太郎の顔は、きつく寄せられた眉間のしわを除き、快楽に歪んでいる。

射精したい射精したい射精したい駄目だ射精射精したいシコシコズコバコビュッビュ射精する駄目だ射精射精シコシコシコシコズコバコビュッビュ射精射精射精射精シコシコズコバコビュッビュ！

駄目だ！

朔太郎は射精渴望に押しつぶされそうになりながらも、ほんの少し残った責任感だけで、どうにか堪えている。

朔太郎の身体はガタガタと震え、ガン勃起太魔羅を握る右手には太い血管が浮き上がっている。

朔太郎の右手が亀頭に近づく。

このまま雁首をシコシコシコシコシこしまくったら絶対に気持ちいい！

雁首シコシコするしかない！ 雁首シコシコしまくるしかない！

雁首をシコシコしまくって男らしくザーメンをぶっ放しまくってシコシコビュッビュ！

朔太郎の頭の中に海綿体の邪悪な叫びが轟く。

7年近い禁欲を強いられている朔太郎にとって、海綿体の邪悪な叫びは津波のように朔太郎の理性を押し流そうとする。

このまま衝動に負けてしまえば、朔太郎はオナ猿のように手コキに溺れてしまえる。

それは、男にとってとても素晴らしいことだ。

オツボとして、射精を禁じられている現状が男の地獄なのだ。

男ならば、射精を取り戻すべきだ。

射精するべきだ。

朔太郎は、脳を揺さぶるような射精への渴望で泣き叫びそうになる。

どうして、こんなにも恐ろしく強大な射精衝動に耐えなければならないのかを、朔太郎は見失いそうになる。

「頑張れ朔太郎！」

「最後の一擦りだ！」

村民たちの応援の声が、朔太郎の壊れかけの理性に届く。

オツボは、戸内村の期待を一身に背負う存在だ。

朔太郎が、オツボの務めを正しく果たすことで、これからの 10 年間の平穏を戸内村にもたらせるのだ。

だから、耐えなければならないのだ。

射精渴望という大嵐に吹き飛ばされそうな意志を奮い立たせ、朔太郎は右手を亀頭まで運んだ。

そして、歯を食いしばり、右腕の血管をより大きく浮き上がらせながら、朔太郎は、右手を陰茎の根本まで戻した。

射精渴望に負けてしまう前に、朔太郎は大きく手を打ち鳴らした。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

射精渴望に耐え抜いた精神的疲労から、朔太郎の呼吸が乱れる。

ガン勃ち太魔羅を握りしめ、手コキに溺れたいという衝動が、朔太郎の右手に集まろうとしている。

「三屈行開始！！！！」

朔太郎は、右手から射精渴望を追い払うために、これまでで最も大きな声で絶叫した。

その声の大きさと切実さが、戸内村を囲む山々に木霊し、小動物たちが驚いて走り出す。

朔太郎は、全身に絡みつき、朔太郎を支配しようとする射精渴望を振り払うようにスクワットを重ねる。

「一屈行！」

「二屈行！」

朔太郎は、第 24 代オツボとして、必死にスクワットを行う。

「三屈行！」

朔太郎の魂の叫びが、戸内村に轟いた。

射精を禁じられてもなお、太魔羅を扱かなければならないオツボ修練である三擦り三屈行を、朔太郎は終えたのだ。

「本日の三擦り三屈行を！」

戸内を囲む山々の神々に！

捧げ奉る！

山々の神々よ！

その荒ぶる御魂を！

和やかにならしめよ！」

夕べの三擦り三屈行を締める宣誓を、朔太郎は叫んだ。

叫び終えた朔太郎は、安堵していた。

今日も、射精渴望に打ち克てた。

第 24 代オツボとして、正しくオツボ修練を終えることができた。

「よくやった！ 流石は朔太郎だ！」

「今日も頑張ったな！」

戸内村の大人たちが、射精渴望に耐え、夕べのオツボ修練である三擦り三屈行を終えた朔太郎に拍手を送る。

戸内村の子どもたちも、性欲を知らず、朔太郎を苛む射精渴望に対する無知を備えながらも、大人たちに倣って朔太郎への拍手を送る。

オツボ修練は毎日のことであるが、村民たちは朔太郎に惜しみのない拍手を送る。

朔太郎がオツボ修練を終えたことを讃え、朔太郎が立派なオツボとして戸内村を見守る山々の神々の元に参じることを願って、村民たちは毎日、拍手を送るのだ。

村民たちの拍手に、朔太郎は狐伏太鼓一本撥祭とオツボに向けられる切実なる祈りを感じた。

そして、この祈りに報いるためにも、オツボ修練を正しく修め、狐伏太鼓一本撥祭に挑まなければならないのだ、と決意を新たにした。

奥付

サンプル版 『淫習シリーズ 02 オツボの定め 狐伏太鼓一本撥祭』

初出：2026 年 04 月 12 日

作者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに 金目堂サークルページ】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01002299.html

【Ci-en 金目堂】

<https://ci-en.dlsite.com/creator/34371>

【金目堂活動報告】 個人ブログ

<https://kinmedo-diary.sblo.jp/>

支援サイトを利用されていない方向けの案内と不定期の雑記に用いています。

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep

同人誌や支援サイト、個人ブログの更新告知に用いています。